

(目的) 社会が知識基盤社会に移行したことにより、学んだ知識を活用し新たな価値を生み出す能力が必要とされるようになった。こうしたジェネリックスキル（汎用的技能）の育成は座学だけでは対応できないため、教育現場ではアクティブ・ラーニング化した講義の導入等が行われている。しかし、優れた教育方法を考案しても、適切に運用されていなければ、学習者に良い教育効果をもたらすとは限らない。そこで我々は講義による教育効果を学習者に対するプレ・ポストテストにより調査し、講義内容の評価・分析を行った。また、分析結果を基に講義の問題点を改善したところ、教育効果を向上させることができたので、その実例を紹介する。**(方法)** 2013、2014年度に開講した薬学部1年次前期・薬学早期体験学習を調査した。我々は「医療の担い手となる心構えを身につける」を学習目標と定め教育を行った。その目標を学習者が達成できたか薬学モデルコアカリキュラムにある「薬剤師に求められる資質」を挙げられるかで評価した。**(結果・考察)** 2013年度は学習者自身に「薬剤師に求められる資質」を想起させるための能動的学修カリキュラムを実施したが、学習者が1年生の場合は医療に関する知識や経験が不足しているため、学習者自らの想起では医療の担い手となる心構えを全て列挙することが困難で十分な教育効果が得られていないことが明らかになった。この結果を基に2014年度は、学習者に「医療の担い手となる心構え」の各項目について理解を深めることを目的としたカリキュラムを実施した。その結果、全ての項目を学習者の80%以上が認知しているという結果が得られた。この結果は学習者に対しより良い変化をもたらすためには、教育方法の改善だけでなく教育効果の評価方法を開発し体系的な教育環境を整える必要があることを意味している。